

がん関連血栓症治療における血液凝固マーカーの開発

① 共同研究・産学連携への意気込み



講師
小川 覚

がん患者さんの抗凝固療法を適正に継続させることで、血栓症関連死の減少に寄与させたい。

② 想定される連携先・移転先

国内の試薬・医療機器メーカーと連携し、新規経口抗凝固薬に対する簡易検査手法の開発を目指しています。

キーワード

がん関連血栓症、血液凝固、トロンビン、抗凝固薬、活性型XI因子

研究内容

緩和ケア領域では、深部静脈血栓症などの静脈血栓症を合併したがん患者さんを診療する機会は稀ではありません。がん関連血栓症 (Cancer Associated Thrombosis: CAT) と呼ばれるこれら病態は、現病死に次いでがん患者における死因の第2位を占めるに至っています。CATに対する抗凝固治療として、ワルファリンや低分子ヘパリンに加え、近年では活性型第X因子 (FXa) 拮抗薬などの非ビタミンK依存性経口抗凝固薬が用いられるようになってきました。一方で、進行がん患者では出血性合併症の利害得失からこれら抗血栓薬を中止せざるを得ない臨床状況は少なくありません。

現在、出血性リスクを低減させた活性型XI因子 (FXIa) 拮抗薬が多数開発段階にあり、CATに対する抗凝固治療への応用が期待されています (図)。定期モニタリングが不要と予想される一方で、高い出血リスク群における治療導入や拮抗療時の簡易的な血液凝固マーカーが開発できれば、臨床での有用性が高いと考えます。本研究では、FXIa拮抗薬の血漿および全血の測定手法を国内医療機器メーカーと共同開発することを目指しています。

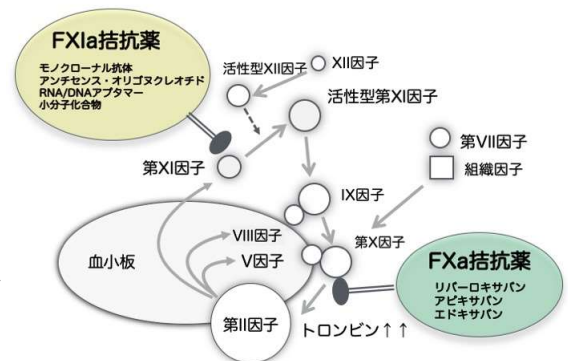


図. CATに対する経口抗凝固薬の標的部位